



NPO PTPL “ともいき” 便り No.106

平成 28 年 (2016 年) 8 月 23 日発行

■処暑 8 月 23 日から 9 月 6 日までの節気

皆さんこんにちは。お元気にお過ごしでしょうか。

さて、「ともいき便り」で、私が担当する小文を、今回から「俳句を遊ぼう」と題してみようと思います。

俳句は、五：七：五の十七文字、短歌は五：七：五：七：七の三十一文字というリズムの短詩形です。

などと書くと、むずかしく思われるかも知れません。が、俳句は短歌と違って、ずっと身近な文芸だといえるでしょう。日常の暮らしのなかで、折にふれて感じることを、ちょっと書き留めておこうというところから、生まれるように思います。

と、いうわけで、これからしばらくの間、蕪村さんの句に親しみたいと思います。ところで、俳句には「季語」(季節感を表すことば)が必要というのが一般です。しかし、この小文では勝手ですが、いわゆる「季語」は、無視させていただきます。

季語に気をとられていると窮屈(きゅうくつ)です。それに、事実「季語」を使わない句もあるようですから。なるべく楽な気持ちで、俳句と付き合ってみましょう。なにしろ、これは「遊び」ですから。

俳句といえばまず浮かぶのは、芭蕉でしょう。しかし、この小文では蕪村(与謝蕪村：よさぶそん)の句で遊ぼうと思います。

◎名月や うさぎのわたる 諏訪の海(蕪村)

おもしろい句ですね。不思議な句でもあります。たぶん、日本で二番目に大

きな諏訪湖（すわこ）を、名月に浮かれたのでしょうか、うさぎが、ピョンピョン跳ねながら渡っていったというのです。

まさか、でしょう？ 第一うさぎは、泳ぎを知らないはず。犬と違って泳げない。たちまち溺れてしまうでしょう。うさぎは本能で、そういうことを知っているはず。わたったとすれば、冬、諏訪湖は氷が張りつめていた、ということになりそうです。

ふと、こんなことも思い浮かびました。

月には、うさぎが棲んでいる（餅をついている？）という話は、当時も、子どもたちに語られていたのかもしれませんが。童話ですね。素敵な童話です。

つまり、この句は蕪村の想像力（イマジネーション）が、願望をこめて描いた風景だったのだらうと思います。

俳句はしばしば、現実の写生から生まれる「詩」であるように思われがちです。

しかし、蕪村のように、心と想像力、そして豊かな感受性があると、こんな愉快的な情景も描ける、というわけです。これが俳句の面白いところのひとつでしょう。蕪村の想像力の豊かさに、感心してしまいます。

◎月今宵 あるじの翁（おきな） 舞出（まいいで）よ （蕪村）

名月。それは不思議な力を持つ、美しい天体といえるでしょう。

名月が、老人を浮かれた気分誘い出して、舞を舞った、というのでしょうか。すばらしく美しい力を、名月はもっているのですね。金色に美しく輝く名月、そんな不思議な力をもっているとしたら、すてきなあとと思ってしまいます。

こんな句を思い出しました。

▼名月や 池をめぐりて 夜もすがら

だれの句でしょう。夜半から夜明けまで、見事な満月を鑑賞しながら池を回り続けた、というのです。なんと、風流なことでしょう。何事にも忙しい現代人には、想像もできません。こういう風流を、ぼくたちは少しは学びたい、そんな気持ちになります。

これはロマン、願望でしょう。何事も「理詰め」になってしまった現代では、思いもよらないロマンを知ることできます。

◎ちちははの ことのみおもふ 秋のくれ (蕪村)

秋の夕暮れ、遠くに離れて住まっている両親のことが、しみじみ思われる。という、親思いの気持ちが深く感じられる、親孝行の一句ですね。現代の世相と、比べて見たいような気持を起こさせる、ちょっと教訓的な句でもあります。しかし、もちろん、蕪村はそんなことを思って吐露したたのではないでしょう。

時代はどんなに変わっても、親を思う気持ちは、民族を越えて、変わらないのではないのでしょうか。とくに日本は仏教の影響もあって、彼岸にはお墓に参って供養するという長い習慣があります。とても良い習慣。よその国にはないであろう、心の文化ではないのでしょうか。自然を尊び、四季それぞれに自然が示してくれる微妙な風情を味わい、楽しんできたすてきな風習であると思います。

なにやら「ドライ」になってしまった現代社会が、さびしく感じられます。高齢になったせいでしょうか。ちなみに、筆者は85歳です。

◎門を出 (いず) れば 我也行く人 秋のくれ (蕪村)

蕪村もまた、寂しさを敏感に感じていた俳人だったのでしょう。もちろん、この句は、単なる感傷ではない。一步、家を出れば、男はひとりの旅人なのだという思いを、強く感じていたのに違いありません。共感をそそる句ですね。

男は、寂しがりやではないか、と、思うことがあります。それに耐えて生きていく。それが、男らしい男(?)なのではないのでしょうか。こんな言葉もあります。「男は雄々しくあらねばならぬ。しかし、優しくあらねばならぬ」というのです。

ぼくは、ときどきこのことばを思い出します。そして自分で自分を励ますのです。弱い者には、「弱い者なり」の生き方がある、ということなのでしょう。

朝倉 勇 (NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 理事)

■ともいき・ともうみ・ともさち、そして和み 雑感彼是

私の願い。(広島・長崎原爆の日に思う。)

私たち日本人は、宗教を持たないと外国人に言われたり、自分でもそう思ったりしています。もちろん、神道や仏教、あるいはキリスト教や諸宗教の信者や信徒はそうではありません。

大多数の日本人は明確な宗教意識を持っていないと見られているのです。その反面、私たちは先祖を供養し、亡き人を弔ってきました。

そして結婚式(キリスト教の教会で結婚式を行う人、そしてクリスマスを祝う人も多くなってきています。)や成人式などを神前で行い、また初詣や祭日に神社に参ります。

かつて冠婚葬祭などの一生儀礼や元旦や歳末、節句や七夕やお盆などの年中行事が形を変えながらも現在に引き継がれているのです。それらを通して、目に見えない、何かを感じ信じているのが、私たち日本人なのではないでしょうか。(無自覚の宗教観といえるかもしれません。)

日本に教義を持った宗教、仏教がたえられたのは奈良時代、それによってわが国の神道も形を整えたと言えます。寺院にならった神社の建立はそのひとつです。神道と仏教は時に対立し、時に共存しながら、長い年月をかけて、この国に大きい位置を占めてきました。近世紀には切支丹排除のために宗派が厳しく定められ、近代には氏神が決められました。そのような神道や仏教は、私たち日本人の暮らし方やものの見方や感じ方のもととなってきました。これを翻訳語の「宗敬」と呼ぶには違和感があります。そこまで言い切れないのが日本人の心情といえるのではないのでしょうか。あえて言えば、「生活宗教」「風土としての宗教(風土宗教)」とも称するものが、私たちと神や仏など見えざる存在との関係です。私たち日本人のここには神も仏も存在しているのです。

この四季の変化に富んだ国土において、私たちを取り巻く自然は、さまざまな恩恵をもたらすと共に、避けがたい災禍を引き起こしてきました。そのような自然の猛威にさらされながら、私たち日本人は天地自然を畏怖畏敬し、その背後に、人の力を越えた大いなる何かを感じ取ってきたのです。

わが国の国土は、唯一絶対なる神の創造によるのではなく、天つ神と国つ神の造営になったものです。神々は天地自然を造り、山や森に鎮まっています。そして仏もまた山野に宿っているのです。

自然において神と仏は共存しています。私たちは自然と和み、四季と和むこ

とによって、神と和み、人と和んできたのです。

自然が荒廃し、災害が多発するこの時代、私たち日本人の自然を畏れ、神仏を敬う心を改めて蘇らせたい。そして「和み」の心をもとに、「ともいき」・「ともうみ」・「ともさち」を旨として生きることがしたい（ジャパネスク）、と願っています。この「ジャパネスク」の運動が日本の隅々まで浸透し、やがて、世界へ広がっていくことを期待しています。

この文章をひとりでも多くの方々に読んでいただければ幸甚です。ご協力ください。

ジャパネスク



勝田 祥三 (NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 理事長)

■事務局だより

●当 NPO 理事の朝倉勇さんの新しい試み、「俳句を遊ぼう」。皆さんお楽しみいただけましたか。名月のお題が 2 句あります。今年の中秋の名月は 9 月 15 日です。晴れるといいといいですね。

●NPO PTPL が展開している 3 つのフェイスブックをぜひ、ご覧ください。そして、「いいね」ボタンを押してください。また、文章に対するコメントもご遠慮なくお書き下さい。

「ともいき ぐらし」：<https://www.facebook.com/tomoikigurashi>

「おらが富士 計画 ふるさと富士山」：<https://www.facebook.com/oragafuji/>

「不思議・驚き・魅力のジャパネスク」

<https://www.facebook.com/japanesque.tokyo/>

●会員募集のご案内

NPO 活動を推進していくためには、多くの皆さま方のご支援・ご協力が不可欠です。

NPO PTPL では、常時、個人会員と法人会員を募集しています。この便りをお読みの方で、ご本人またはお知り合いの方々にご案内いただければ幸いです。詳しくは下記まで、メールまたはお電話・FAX にてお尋ねください。

NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 事務局 担当：佐藤

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-2-18 虎ノ門興業ビル 7 階

電話：03-6205-7503 FAX：03-6205-7504

Email：info@ptpl.or.jp